

---

# 愛ってコトバ

NAoK ICHI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛つてコトバ

### 【著者名】

NAOKICHI

### 【あらすじ】

愛のしるしの続編です。やっぱり大好きな人には好きって言ってほしい…好きだから触れたいの…大切なのは今。私はそう思いたいよ……

「ふう」

1秒…また1秒

何もしない。

ただ、呼吸して寝てるだけ

何もしないのに刻々と時間は刻まれていく  
ほら…また1秒。

私…生きてる

「奈央！…」  
「ごめんねー遅くなっちゃって」

今日はクラスのみんなとの打ち上げだった  
風邪がひどくて少し遅れていった

無意識に富田の姿を探していた  
わりと時間はからなかつた  
ばちつと田が合う  
少し、嬉しくなつて手を小さく振つた  
ちょっとだけ微笑んでくれた

この頃…1年生の子が富田を好きだつて聞いた  
結構かわいくて富田と同じ部活の子…  
たぶん本人は気づいてないよね??

あーあー

なんで、うーん… マンガみたいにうまくいかないのかな…  
いつもマンガのヒロインはきらきらしていて、幸せそうに笑っていて  
なんで、私たちはマンガみたいにうまくいかないのかな??

「ふう」

あんまり心配せないでよ

なんでこんなに不安になってるかつて言ひと…

富田の愛つて感じたことって、全然ない  
半年記念から2ヶ月たつた今でも2度目のキスはない

あーあー

好き… 大好き

恋してるって樂しいけど、辛い

でも今、私恋しちゃってるなあ

「やつと栄が私に言った  
「つなちゃん、告つたらしこよ」

「ええっ？？」

びっくりして大きな声がつい出て軽くみんながこっちを向いたりなちゃんって言つのは「富田の」とが好きだつて言つ一年生の子。

「ど、ど、ど、だつて？？」

「むちむん、断つたらじこよ

ちょつと…安心

「よかつたね」「  
にやつと笑う

「何が！……！」

「顔赤いよ～？？」

「知りませんつ！…！」

逃げるよつて「コップを持つてドリンクをつぎにいった

「ふう」

「大丈夫？？体調悪そつ」

富田が心配そうな顔でかけてきてくれた

「大丈夫だよ」

やつぱり風邪のかも  
胸が苦しい  
どきどきする

熱がある

…わかんない、あなたの前だからかな??

…そつと持つている「コップ」を持つてくれた

…ほら、君つてなんでそんなに優しいの??

私が何も知らないと思つて安心してていいやう??

違うよ、それは…違つの

ねえ、気づいてよ

カララン

「よお

声のした方を振り返る

手を振つてこちうこやつしてきた  
望だ…

1組のメンバーもがんぞうとやつてきた

「俺等もこいで食つにきた

…見慣れた顔

大きい手

笑い方  
話し方  
とつをに見せる癖

すべて覚えていた

そう、私が前本当に大好きだった人。

この人に何度も泣かされたかな??

好きすぎて話すときは顔も見られなくて、顔はもうりんご病みたい  
だった

君だったて、耳真っ赤だったよ??

…迷惑かけちゃってごめんね、私のせいでいつも冷やかされてた  
手紙に弱々しい「好き」の文字。初めての告白ですか」こぞぞぞぞ  
てた

胸が痛くて壊れちゃいそうなくら」こぞぞぞぞしてたの  
でも…なぜか読めなかつたつて。  
洗濯されちゃつたつて

…そんなことあるのかよつて思いつつ氣づいたら電話してた

「…」ごめん、好きなの」

本当にどうしようもないくらい好きだった

君に聞こえないかもしけな「くら」このせわやき声で愛のコトバを口  
にした

でも間があつてから、気づいたら電話は切れてて…

ああ、私はふられたんだなあつて思つた…

本当に悲しくつて涙は枯れることを知らなかつたよ

「もう、好きじゃない」

友達に言いまくった

自分に言い聞かせてるだけかもしれない

だって、今でもあなたのこと田で追ってる私がいたの

いつまでも捨てられなかつた誕生日プレゼントだつたペアのキー ホルダーは、机の中で眠つていた

誕生日にさしだしたら、君は走つて帰つてつたね

…ひどい人

忘れられたら、楽なのに

いつまでも君にときめいやうのは… なんでだらう…?

「これ、あげるよ」

たまたま前の席の富田にあげた

この頃、仲がよくて… こちるのがおもしろいなと思つて いる人。

だから君が捨ててくれればいいと思つた。

自分では捨てられなかつたから

でもその見たくもないキー ホルダーは1週間たつても2週間たつても君の筆箱にぶらさがつていたね

望がしてくれなかつたことを富田はさううとしてくれた  
ただ、嬉しかつた  
単純にすごく嬉しかつたの

望がしてくれなかつたことを富田はさううとしてくれた

ただ、それだけ。

それで君がすつごに可愛く見えてしまつたの

本当に…恋の始まりって単純だよね

たぶん…望を嫌いになつたら次の恋なんてやつてこないのだ、と思つていた

でも傷ついた私の心は行き場のないあふれるような想いを誰かに注ぎたかつただけかもしない

あの時のように笑つて話せたら…

何度も思つた

だけど時は止まることを知らない

幾度となく押し上げてくる悲しみは私を暗い世界へと追いやつた

それでも月日は流れ、新しい恋を運んでくる

恋つてそつゆつものなんだ…“癒し”を求める心に響くのはきっと恋なんだろうな

誰かが言つてた氣がする

地球上でもつとも重い病は恋だつて、薬がないから治らないって

どうしたら私はこの病から逃れることができるのかな・・・??

ふと見上げる空には星がちりばめられてた

月があまりにも綺麗で…いつもより距離を感じた

空や月にまでふられちゃつたみたいに感じた

辛かつたり嬉しかつたり

悲しくつて泣きたくなつたり

会いたいと思えど会えないむなしさ…

この想いからどう逃げればいいんだろう??

そんなことを永遠と考えていた

「はつ、はいい」

思わず叫んでしまつた

「な…なんざんしょ？」

「ちょっと、来て

ムリに手を引かれあえなく退出

「待つて！！何？？寒いよ…」

外に連れ出されて私は薄着で寒かつた

「言いたいことがあって今日は来たんだ  
びくつと体が反応した

何したつけ？怒られるよくなこと…した！？

ここしばらくの間私たちが話すなんてめったになかった  
1回だけ話しかけたが軽く、冷たく返されたのでもう話しかけることはなかつた

そう、すごい久しぶりに話す…

「俺さあ、お前のこと別に嫌いじゃなかつたよ  
あの時告白してくれたぢゃん？頭真っ白になっちゃって何言つていいかわからなくなっちゃつただけ。  
電話もきつちゃつてごめんね。

突然すぎて何も言えなかつたんだ…

これだけ伝えたかつたんだ。

何か言いたいことある？

言いたいこと…あるよ、いっぱいね  
でも、それって1年以上前の話だよ？  
半年もかけて、君のこと忘れたんだよ…君が笑えばなぜか悲しくなつた

失恋つてそういうことでしょ？

痛いほど君が教えてくれたぢゃん

私は初めて失恋を教わったんだから

「…別に気にしてないよ  
うそ、すつじい気にしてた

「てゆーか、覚えてたことにびっくり…！」

あの時は好きすぎて周りが見えなくなつてた

私こそ「ごめんね」

…本心、だけど大事なこと隠してる

なんでだろう、今は素直になつてもいい時だよね？？

君の前では本当の自分がだせないの… 素直になんかなれないの…

なんで？？

「今は誰が好き？」

「ええー、ムリだよ、言えないつて…！」

…軽々しく望になんか言えないよ

今だつて忘れたんじゃなくて、君へのキモチを隠しただけなんだから

「一度はつかあいかけたなかだろー言えつてえ…！」

そんなこと一回も思つたことなんてない

いまさら嫌いじゃなかつたとか、何を言い出すの？

どうせ、あの時だつて告白OKする気なかつたんでしょう？

それなのに…

「…知らない」

「別に…いいだろ？教えろつて…！」

「絶対、言わない！知らない…もう…ほつといて…」

望は軽く言つてるだけなんだろうけど私には大きいんだよ

なんで…気づいてくれないの？？

「もしかして、まだ俺のこと好きつてこと？？」

は…？？

好きじゃないって…  
好きなのは…君じゃない…きっと…いや、絶対に…そう言い聞かせてきたんだから

「好きな人は いるよ、だから安心してね??  
でも今はまだ言えないかも。」

付き合つてるのって言えたらな。  
たつたそれだけのこと。

なのに何かが怖くて、悲しくてそのままコトバを言つたりとはできなかつた

簡単なことだよね

ただ、それだけ。でかたずけられるようなちっぽけなコトバ  
でも出てこなかつた…

私は弱いから何も壊したくなかったの…本当に私は弱いなあ…

望は今も昔も何もわかつてない

ここまでにひきずつてる私も私なのだけど…

昔の記憶ももう忘れる。これだけはとつておこうなんてキモチも捨てる

絶対に絶対に、今度こそ忘れるよ…

みんなの所へ戻る前にトイレへ行つて、顔を洗つた  
涙のあとが頬についていた

「ふう」

それを服の袖でぬぐつた  
いやな顔。

こんななんじや 愛想つかされりや'つね…

「ふう」

「何? セツキの、びっくりしたじやん。ビーしたの?」  
栄が聞いてくる

「たいした話じやなかつたよー」

軽く笑みを浮かべた

栄は私の話を無視して、トイレへとつれこんだ  
「奈央、泣いてる…」

栄はせつなそうな顔で私を覗き込んだ  
あんな笑い方も見逃さなかつた  
私のこと…わかってくれてる…」めんね

「うつ…だつて…ムリだよ…

いまさら、嫌いじやないとか言つのーー私のことふつたくせにさ  
あ…

1年以上もたつて…しかも6年間も好きで忘れられるわけない  
じやん

もう日々の生活に望がいるのが私の普通だつた!!

それでも…あきらめたつていつのに…

大人から見たら14歳の私の言つてることなんておままでつて

「… いつも不安だけ残して愛はくれない  
好きだよ、大好きなの  
なんですか？」

「… 言つかもしれないけど、本気で好きだったんだよ  
そんな… 忘れられるわけないじゃん…」

「… 昔の記憶を思い出せたとして… 望は何がしたいのかわからぬよ  
今でもあの時の望の顔とか、嬉しかったこととか忘れられないの  
… だから錯覚をおこしちゃったの  
昔の記憶があまりにも鮮明に思い出せるから富田が一瞬見えなく  
なった…」

「… ひどいよね、私

「… わかつてんんだよ…でも… 私の中で何かが引っかかるの…」

「… なんで… いまわい… 思い出せたの?」

「… 茉はぽんぽんと私の頭をなでてくれた

「… そうだよね、奈央す」に好きだったもんね  
忘れられないよ、普通。  
とりあえず富田がす」に心配してたみたいだから… ほーうー…元  
『氣出せつ

「… 泣き顔ぶさいよ?」

「… 笑顔の方が奈央は可愛いんだから」

「… ねえ、私に氣づいたら君はなんていってくれる?」

「… コトバなんて君はくれないか

「… いつも不安だけ残して愛はくれない  
好きだよ、大好きなの  
なんですか？」

どーして??

私に魅力がないからななあ??

「ふう」

いつまでも君のことが見ていたい  
見ていたら声が聞きたくなるの  
声を聞いてしまったら、話したくなっちゃうじやん  
話したらずつと一緒にいたくて離れられない  
一緒に時間をすごしてしまえば、私は君に触れたくてたまらない  
それって、変??

何か間違ってるのかな…

ただ私が君のこと大好きってキモチの表れだよね??

「帰るつか

誰かが口にしてみんな一斉に立つた

頭が痛い

気持ちが悪い

胸が苦しい

不思議とぽかぽかする

なんだか涙がでてきそう

なんだろう…

「奈央…つ…！熱あるじゃん、大丈夫？？」

「…うん」

「チャリの後ろ乗せてもらいいなね？？」

「くんと、うなずいた

ふわあーっとした気分でなんかぐるぐるする

「…え？？」

急に腕をつかまれてびっくりして、思わず声が出た

「ふらついてる、大丈夫！？ムリ…するなよ」

・富田

「大丈夫…帰る？？」

「後ろ乗つてけば」

後ろから声がした

・望だ

「んー、いーよ。栄に乗せてもらおうかなあつて」

腕をつかんでいた富田の手が離れていった

なんだか、寒くなつた気がした

今望は私の恋の邪魔したんだよ?  
いいかげん…鈍感なおしてよ  
迷惑だから…迷惑なんだから…

キー ロ キー ロ

「…奈央は愛されてるんだよ  
みんなから。いいことじやん、富田は奈央のこと好きなんだし…  
望はさあ、奈央にとつて大きいかもしけないけど忘れるつて言つ  
のも一つの愛の形かもしけないよ」

確かに…

愛の形は一つじやないよね

気づけば、頬をぬらしていた

冷たい風が吹きぬけ頬のしづくをより冷たく、頬を痛くした

君への隠してた想いも今日で本当に封印するよ  
この寒空の下で流した涙が最後です

さよなら…

本当に好きでした

そして…

「ありがと」

「…奈央、送つてく」

あるていど所まできたらみんなとも別れなければいけなかつた  
富田が心配そうに顔を覗き込んでいた

「ありがと」

「…」

「…望と何話してたの？？」

なんで…

「別にたいした話じゃなかつたよ」

「ふーん…望つて奈央のことが好きなの？？」

なんで…富田がそんなこと言つたの

「前好きだつたんでしょ」

なんで…こつもそんなこと言わないじやん

「前から両想いだつたの？俺…ＫＹじやん」

なんで…富田のばか…

「知らない、ふられたし…私。

富田が何でそんなこと言うの？？意味わかんない！！  
いつもそーやつて勝手に…私のことさあ…いつも冷たいし…  
好きとか私が聞かなかつたら言つてくれなかつたでしょ！？  
何通も書いたお手紙も無視するじゃん

大事なのは今なんじゃないの！？

意味わかんないよ…

富田にだけは…そんなこと言われたくなかった  
いつも…不安だけ残して…私に愛はくれなくつて…寂しいよ…  
好きなのに…大好きなのに…なんで伝わらないかな…」

泣くな…

泣くな…

冷たいって思つた

一生懸命になつて書いたお手紙は無視するし  
話しかけてもたまに無視するし

学校でだつて話すわけでもなく、メールするわけでもなく  
：そんなんじや、不安になるばつかりなの  
本当に好きなのかな、とか本当に信じていのとか…ひどいことば  
つかり考えてた

でも、いつも富田の優しさに触れていたこと知つてたよ  
嬉しかつたの

なんで…大事なときに素直になれないのかあ…

「奈央だつて…簡単に望についていって、2人つきりで話してゐるに気にならないわけない…!  
なんで隠すんだよ…

悪かつたな！余裕なくつて…」

男の子はさうい…いつもわうやつて悲しそうな顔を見てしまえば、私は触れたくてたまらなくなつたやうんだよ

ぎゅうつ

私は気持ちが抑えられなくなつて抱きついた

「え…え…え…」

「…好き、なの。望じやなくて富田が。  
いつまでも大好きでたまんないよ」

さつきよりも力を込める

「…俺にとつて付き合いつのもバレンタインもうつのも、キッ…キ

スだつて初めてなんだよ…

余裕なんてどこにもなくて

でも奈央はどんどん次に行つてしまつ氣がして…正直つかめなか

つたんだ

ずつと、じうしてたいつて俺は思つてゐ…

だけど好きな子一人抱きしめるのだつて…結構大変なんだよ…」

たぶんこの声は、私がいる距離にしか届かない

「…それだけ愛があるつて」とじやん  
ちよつとだけ背伸びをして頬にキスをした

赤くなる君が愛しい  
もつともつとつて、求めたい  
まがままだつて君だから言いたいの

やつぱり機嫌が悪くてもむーつになつてゐる時は私にむーの意味を教えてほしい

少しでも一緒に分かち合いたい  
私と一緒にいることが少しでも君のプラスになつたらいいな  
悲しいのだつて半分」

嬉しいのは2倍

それつてすつごい素敵なことだなあつて思つよ

君は…どうかなあ??

横にあるガーデレールに私を座らせた

「愛、あるから」

そつと私の顔に手を添える

時間をかけてゆつくりと愛しい人が私との距離をちぢめる  
嬉しいような、恥ずかしいような…もどかしい時間。

目を閉じればそこに君がない  
でも唇にぬくもりを感じる

“愛あるから”

一つ一つが愛しい  
君すべてを感じてみたい

久々の君の愛を私は感じてる

嬉しくて泣いちゃいそうだよ

こんな彼女で「めんね  
わがままばっかりで「めんね  
不安つて言つて結局は君を傷つけてた  
可愛げもないし、すぐ怒っちゃつし…本当にもつと柔みたいな子が  
富田のことが好きだつたら富田もきっとみんなに自慢できるし幸せ  
だらうな…って思つ

でもね、私まがままなの。だから好きな人は私の手で幸せにしたいよ

今、君は“幸せだな”って思つてくれてるかなあ??  
私は君といつられて触れられることが何よりの幸せだよ

そつと顔が離れる  
ゆづくつと皿を開ければそこには真っ赤な富田がいる

自然と笑顔になつた

「あ... 離...」

「わあ、本当だ...」

そつと降つてきた雪をつかまえた  
すうつと雪はとけていった

そのまま手を空にかざした

「なんだか...月だつて星だつて捕まえられそうな気がする」  
...たぶん、君は意味がわからなかつただろうね  
でもね、私の気持ちにはそのコトバがぴつたりだと思つた

雪は私の手中でとけていってしまったけど、あの遠くに光る月も  
星だつて今だつたら手が届きそつ。

前見上げた空よりも今見える空のほうが近い気がした  
なんですか？？

君とだつたら、大きな夢も叶えられるような気がする...

だつて君と出会えたことも今一緒にいること、そして...「好きだよ」  
つて言つてくれる奇跡だつて“幸せ”に変えられたんだよ  
君の優しさに触れて私はもつと大人になれた  
もつと好きになることができたの

「寒いね」

富田がぎゅつて抱きしめてくれた  
ちよつと照れた声...

「暖かい…」

力が強くなつて、ちょっとだけ痛かった  
その痛みさえ心地いいと感じる

「俺、本当に奈央だけだから。」

トクン、トクンって心臓の音が伝わってきた

愛おしい

君だけ。

この世界にたつた1人の君が私は、好きで好きでたまりません

星降ル夜、君ヲ抱キシメル

「嘘、  
かなりあるから」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5905d/>

---

愛ってコトバ

2010年12月19日07時03分発行